

研究の窓

ボランティア活動と福祉コミュニティへのひとつの視座

生活地域で自発的自主的な福祉活動をつづけている多様なグループに接触して、それらが地域社会を「成熟したコミュニティ」（奥田道大の用語）に高めることに貢献しているにちがいない、と思った。70年代の10年間にわたる「実践記録と提言」「小地域活動の役割と可能性」「地域をつくる——福祉文化を住民の手で——」I, II, ほかの、「かながわボランティアセンター」による精力的な刊行物は、説得力に富む労作である。さらに全国的な記録と分析は、奥田編『福祉コミュニティ論』（学文社）が世に問うところであった。これらの活動の焦点は、「アイデンティティ」である（町村敬志）。「自立的主体としての自己定義と社会的機会の確立と、自由な表現と自立的メディアによって裏付けられたコミュニケーション過程の実現と文化創出」がその中心であり、社会的弱者・マイノリティ・被抑圧集団といった当事者、ならびに自分のこととしてかれらと連帯する人びとが担うところである（「低成長期における都市社会運動の展開」）。70年代後半以降このタイプの地域住民活動が相対的に急増している事実を東京都下のデータから発見して町村は「（かかる）運動の盛衰に大きな影響をあたえる集団群——地域住民組織、趣味の会、サークル、ボランティア団体など——について整理が待たれる」と指摘しており、全く同感である。

その点で一歩ふみこんだ鈴木広は、障害者対象ボランティア活動が閉鎖的・脱地域的・脱組織的な性格をもっていることを指摘して、地域の既存の住民組織への影響関係上、困難な問題があることを示唆した（「ボランティア行為の福祉社会学」）。これまでの多くの活動現象にそのような組織性がみられるのは事実であろうが、障害者対象ボランティア活動が地域の老人対象の老人クラブや子ども対象の子ども会に比べて閉鎖的、脱地域的、脱組織的であるとしても、それはかかるボランティア活動に本質的性格であるとはいえない、と私は思う。現にノーマライゼーションを願って地域に開かれた活動をユニークにすすめている例もある。そして何よりもまわりの人たちの偏見がそうさせていることを軽視できない。さらには行政施策が重要な意味をもつ。障害者のボランティア活動には自治体から援助金が出されるようになって、それは十分とはいえなくとも有益である。しかしこの認可条件は当然のことながら、障害者の属性、障害度、活動内容、ボランティアの具体的関与等を中心とする閉鎖的な資料に依拠するもので、地域社会や他の地域集団との関係などは問題にされない。財政的に活動を安定させるためには、意識して脱地域的・閉鎖的にすすめるをえない面もあった、と思う。

本来、鈴木が問いつめていく課題は、構造的な都市化の矛盾を切り開いて福祉コミュニティを

可能にする人と社会の法則は何か、というところにあるとみられる。もちろん、私の関心にむけた強引な解釈であろうが、そこでは日本社会の集団文化の問い直しが今や起こっているという点に着目されているものと受けとめたい。

この粗雑な整理が許されれば、新しい社会運動としてボランティア活動を展望した町村論文から鈴木論文（「都市人の生活構造論序説」）をへて、私の立論に連なりうると考える。それは、平易に言えば町内会の文化変容といってもよい。ただしそこでは、町内会の部会にとりこむタイプから、福祉コミュニティにふさわしい複合的調整機能本位の組織体系にすっかり脱皮するタイプまで、さまざまな自己変革が現れつつある。奥田が「関西型」とよぶところの、イメージとしての“地域社会がひとつの福祉コミュニティ施設”をおもわせる変容が、先進的な少例ながらみられるところである。研究はまだ、その法則を明示するに至っていないけれども、私はかつて、町内会的集団文化とボランティア活動が柔らかくうち出す生活様式への提示が交差する影響関係を考察した。それは集団力学であるよりも、もっと基本的な問題——住民の自己変革・自我の組みかえによる成長と福祉コミュニティ的役割開発・既存の伝統的な知恵をとりこんだ地域福祉文化の創造力——を意味することだった。

その点に若干の追加をしたい。ベン・デービッドの説であるが、「一定の社会活動が持続されるためには、その活動を遂行する一定の役割*が出現し、その役割が特定の社会集団によって理解され、積極的に評価（正当化）されるのでなければならない」と彼はいう（『科学の社会学』）。そのことはボランティア活動が既存住民組織に浸透しその集団の文化変容をおこす一般理論でもあろう。それは一度きりの戦術戦略のなしうることではない。町内社会で当たり前と思われる自発的支えあいから地道なコミュニティ的役割創造が新鮮に開放的に実践されるなかで新しい制度化が実現する。“福祉コミュニティ”と気軽にいうけれども、この国の現状では、上記のようなあらゆる自覚的な活動をとおして孫子の代までかかるという大変な日常的営みにちがいない。

コミュニティそのことであるが、産物としての出来上がったモノをさすべきではない。形に現れた創造の営為の動きのある総体である。だから、動きが止まってしまえば、それも幻の如く消えるであろう。それではあまりにも緊張の連続になってしまうので、しばしの安定として、新しい制度化が必要になる、という意味である。

※ ここでいう「役割」とは、人びとが独自の機能をもつ社会的相互作用の単位としてとらえ、所与の状況のもとで人びとが適切とみなす行動、感情、動機のパターンをさしている。普通には、既存の組織構造を維持する機能として理解されるが、新しい非通念的で日常的な役割創出によって、既存の構造を組みかえる「制度化」の可能性に着目するものである。

越 智 昇

（おち・のぼる 創価大学教授）